

城門と櫓：東御門、巽櫓、坤櫓

駿府城は 1580 年代後半に初めて築城され、19 世紀後半まで使用された。城門の 1 つと櫓の 2 つは、17 世紀の最盛期の城のスタイルで再建されたものである。櫓は周囲を取り囲む城壁の隅に設けられることが多く、見張り台、防御拠点、武器庫として利用された。

東御門（1996 年竣工）

城の敷地の東側にある東御門は、要人のみが使用する門であった。門は桁形で、大きく重い扉が 2 組ある。防御側は、門に入った侵入者を、2 組の扉を閉めて上から攻撃することで罨にかけることができた。門の厚い壁には、弓を入れるための長方形の穴と、銃を入れるための円形の穴が開いている。また、門の上の床板には、下にいる敵に向かって石を落とすための蝶番が取り付けられている。

巽櫓（1989 年竣工）

巽櫓は、珍しい L 字型のデザインの櫓だ。この門のデザインは、1638 年に完成した大改築工事にさかのぼる。櫓の内部には、図面や城内から出土した遺品が展示されている。2 階には、徳川家康公（1542-1616）が少年時代に学んでいた臨濟寺の部屋が復元されている。

坤櫓（2014 年竣工）

坤櫓は、駿府城の南西隅に位置している。東アジアの地占いで南（未）と西（申）の方角にちなんで、未と申を組み合わせて名づけられた。櫓の内部には、日本の伝統的な建築技術や工法を紹介する展示がある。床板や天井板が取り外され、内部の構造が見えるようになっている。ある展示では、伝統的な接合部の模型を使って、伝統的な大工仕事を解説している。また、竹や縄を土や藁、天然の漆喰で覆っていく伝統的な壁の作り方も紹介されている。